



海外レポート

## 日本留学と帰国後の韓国生活

柳 青 魯\*

### 1. はじめに

1980年4月から1984年3月まで日本国国費留学生として大阪大学工学部土木工学科の樫木先生の下で四年間の留学を終え博士号を取得し、帰国したが、私にとっての日本留学の意味と韓国での専門家としての立場からこの文を書いてみたいと思う。

### 2. 日本留学

日本留学四年間は私にとって最も重要な人生の充電期であった。これは幸いにも6カ月あまりの日本語の勉強で難しいと言われている日本国費留学生試験に合格してからはじまる。その時、私は釜山水産大学で物理海洋学を学んでいたが、新設したばかりの海洋工学科の助手となった時でもあり、他の先生方らに海洋工学を研究して来たらと言われたが、どこの大学のどんな先生の下に行ったらいいのか莫然としており全くわからなかった。

母国の張先生と阪大の樫木先生との間に話し合いがついて、私はすべてを樫木先生にまかせた状態で樫木研に派遣されるようになった。樫木先生とはじめてお目にかかり、研究方向を決定する際先生ははっきりと私に話された。“貴方の国における海洋工学はまずは海岸からでしょう”今になって考えたら先生のこの言葉は、よく韓国の事情を御存知で適確な判断だったなとうなずいている。

それからは海岸構造物の安定性を中心として海岸開発の視野を広げていき、またその方面の博士論文をまとめるための研究も深めていった。後野助手との日本語の本読みなどの日本語

勉強と discussion, 出口助教授と研究室の若者が大阪の海岸線を Camping しながら歩きまわった時の高潮防潮堤のてっぺんを歩く時の緊張感、夏の研究室ゼミ旅行はかならず海岸工事現場を見学したが、一度何人かが一行とはなれて久保先生の Yacht で旅行地について樫木先生にきつく怒られ、翌日改めて見学しなおした記憶、原因のわからぬ病気で入院した時の樫木先生と研究室の皆様の温情はまさに父と兄弟のように感じたことである。日本での出来事をいちいち書こうと思ったら限りがない。研究の方面でもいつも緊張して研究室のゼミ、室田研との共同ゼミの時に先生方らに怒られないよう研究に取り組んだはずだったが、留学中先生方に御迷惑をおかけしたことも少なくない。

また私にとって大きな出来事は家内が勉強を再度始めたことである（現在工学部環境工学科 Doctor コース在籍中）。それが私の留学中の3年目からで、娘を保育園にあずけ、2人して大阪大学に出校するようになり、その時の1日1日はまさに忙がしい極みであった。

いろいろなできごとに遭遇しながらもしらぬうちに四年がたって、阪大の博士号を取得することになり留学中になくなった父の前に面目が立つようになった。1984年3月末一家は明るく帰国の JAL機にのった。家内はまた研究をつづけるため阪大にもどることになった状態だったが……。

### 3. 帰国後の韓国生活

私は1984年4月10日付で母校の水産大学海洋工学科の助教授に昇任した。学校でも若い日本の博士として期待されたようだ。私もわからぬうちに日本での生活が身につについて、いろいろと不満な点が多かったことも事実である。四年間のギャップをのり越えて韓国の研究生活に適應

\*柳 青魯 (Cheong-Ro RYU), 韓国, 国立釜山水産大学, 海洋学部, 海洋工学科, 助教授, 工学博士, 海岸工学

するのに相当の時間がかかった。今では研究だけではなく、日本の先進国らしい社会をよく吟味しながら、私のまわりからでも日本の研究生生活、社会生活のように充実したものにするために1からがんばっている。その面で民間の借家に住みながら日本社会の隅から隅までをよく見ようと考えた日本での生活はもう一つ重大な日本留学での収穫であったと考えている。

#### 4. 韓国の海岸工学と私の役割

韓国の海岸でも工業団地造成、住宅団地造成等から港湾建設まで規模はまだ小さいけど日本と同じ感覚で開発作業が現在行われつつある。海外建設でもそうであるが、韓国の土木の大きな問題は技術開発及び研究風土が作られていないことである。海岸工学の分野でも例外ではなく韓国人特有の性急さから基本的な技術検討が終わるのを待たずにはいることも少なくない。それも理解できるのは現在韓国において海岸工学分野の研究者数は土木学会の海岸海洋分野の参加人数を基準として多くみつもっても30人程度であり、海岸を専門として博士号をもっている人数はまだ10人にも満たない。私も勿論そのうちの1人であり、若者として帰国したとたんに注目されたことも事実で、その役割をはたすためにがんばっている現在である。

また1つ言っておきたいのは、10人あまりの海岸専門学者のうち阪大の樫木先生の研究室にお世話になった人が5人もあるということである。まさに樫木学派が韓国で着実に根をはっており、いまでも樫木研には5人もの韓国留学生がおるはずであり、韓国での阪大の力が期待される。これは海岸分野だけではなく都市交通分野、土質・構造分野においても多数の阪大出身者が韓国の土木発展に大きく貢献している。公式的な記録ではないが韓国の土木界においては外国の一つの大学出身としては阪大出身が最も多いと思われる。一部では阪大土木の同窓会も考えているくらいである。

また、韓国の水産分野には水産土木の技術が必要であることを認めながらも土木技術者が皆無の状態である。海関係の専門技術者はまだまだ必要であるが人材が育っていない。したがっ

て私のような若輩にも仕事が多くおしつけられやり甲斐も大きいのが、人生が苦しく感じられることも少なくない。

まだ若いから着実に研究に取り組もうという気持とは反対に、いろいろな政府関係の委員会に呼出されたり、技術諮問に応じたりしなければならなくなった。まずは国の長期総合海洋開発計画樹立のための海洋空間利用分科の専門技術諮問委員になることになったことと、水産庁の沿岸開発に関する技術諮問会議に出席したり、釜山などの大規模工業団地造成事業の技術検討に努めるなど阪大での四年間で学んだことを十分すぎるくらい駆使している状況である。

このように各種の外的な仕事が、私には負わされているが、今後ますます仕事はふえると考えられ、仕事が新しく増すたびに、日本にいた間に何故もっとがんばらなかつたのかが残念に思えるが、今でも樫木先生になにもかも頼むのが現状である。これを見た大学のまわりの先生方からうらやましがられるので私はそのたびに樫木先生に感謝している。

いままでは学外の仕事を述べたが、学内でもそれに負けない程度の仕事がある。例えば講義は15時間ぐらいで学部が7時間大学院が7～8時間の割合である。それに学生運動が激しいだけにその学生との対応の仕事も多くなる。あまりにも私自身の時間がない状態ではあるが毎日を頑張っていて、日本留学から得られた種子を韓国に植えて丈夫に育てていく積りである。

#### 5. おわりに

私は日本のいい面をまわりによく言うが、むかしの親日派的感覚としてではなく、日本社会のすばらしい面を評価していき、それを私の国において発展させていこうという希望が大きいからである。研究室の作り方もしらない時に樫木先生に学んだこと、家庭生活においても日本でのまわりの人の生活風俗に学んだことは私にとって極めて大きい。日本のいいことばかりがよく思い出されるのは自分が考えても不思議であるが、当初から日本のいいことばかりを何もかも学んでいこうと言われた父の最後の言葉が耳

をはなれなかったことと、幸にも私のまわりの日本人の人々がみんな良い方であったためであろう。最初に記したように私にとって阪大生活四年は人生の充電期であり、今では国においてもっともっと研究をつづけながら国の海岸工学発展の一役を担っている。最後にこのような機

会を与えて頂いた日本政府と阪大の先生方に感謝する次第である。そして今後も私と韓国学生のいい面に期待してますますのご指導をお願いするとともに、私自身は韓国と日本とが本当に仲のいい国になるように頑張っていきたいと思う。



## 限りある資源を大切に…… の姿勢を守るDNT

現在は、“鉄の文明”と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。

DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。

そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●

**DNT**  
大日本塗料

●大阪市此花区西九条6-1-124  
〒554 ☎(06)461-5371(大代)  
●東京都千代田区丸の内3-3-1  
〒100 ☎(03)216-1861(大代)